

沖縄愛楽園を訪問して

2月下旬に沖縄県で開催された第34回人権啓発研究会に参加した機会に、ハンセン病療養施設「沖縄愛楽園」を訪問しました。

沖縄愛楽園は1938（昭和13）年「国頭愛楽園」として開園され、1941（昭和16）年7月1日に国に移管され、国立療養所となりました。現在124名の方が入所され、平均年齢は85歳です。

学芸員さんに案内されて、話を聞きながら園内を廻りましたが、愛楽園は沖縄戦との関連が極めて深いことを知りました。

〈日戸収容〉

1944（昭和19）年3月、沖縄に第32軍が創設されると、約10万人の将兵が沖縄に入ってきました。兵舎不足を補うために、軍が地域の学校や公民館のほか民家までも接收して利用したため、将兵と住民が地域に混在するようになりました。

そのような中で、軍は在宅のハンセン病患者を警戒し、将兵への感染

を恐れました。そして、地域の患者は軍によってその存在が調査され、1944（昭和19）年9月の大収容につながっていきます。

この大収容は、その指揮をとった第9師団の日戸修一軍医の名前を冠して「日戸収容」とか「軍収容」と呼ばれています。それまで人目を忍んで行われてきた患者収容が、白昼、軍によって人前に晒されることになり、定員450人の愛楽園に913人も患者が隔離されました。このことは、未知なものへの恐怖、ハンセン病への恐怖をさらに高めました。このとき、軍に協力したのが愛楽園2代目園長 早田皓氏でした。

〈早田壕〉

早田園長の指示で、園内の小高い丘に横穴式の防空壕が掘られました。作業に参加すれば茶碗一杯の粥が出るということで、比較的状況の軽い入所者が、道具が十分でない中、壕掘り作業に当たられたそうです。この丘には化石化した貝が堆積して

おり、貝殻によって作業中に受傷し、化膿したために指や手足を切断された方もあったとのこと。

この防空壕は入所者全員が収容できるほどのもので、空襲による被害は1名だったものの、狭い壕内では衛生状況も悪く、栄養失調、マラリア、アメーバ赤痢などに罹患し、約1年の間に288名の方が亡くなられました。隔離と戦争の二重の苦しみがあった場所でした。

愛楽園の入所者は、沖縄の臨戦態勢のために排除され、兵力を阻害する者として隔離収容されました。世界的に新型コロナウイルスの感染が広がる今、ハンセン病と同じように未知の病への不安が、差別を生み出してはいないでしょうか。

人権教育推進員からひとこと

4月から新しく人権教育推進員になりました。門脇英之です。人権教育において、住民学習活動等の指導や相談にのります。お気軽にご相談ください。



新型コロナウイルス感染症の拡大とともに、デマや真意が不確かな情報が拡がり、SNS等で誹謗中傷や風評被害等の人権侵害が起こっています。個人への中傷やいじめ、偏見や差別は決してあってはならないことです。正しい情報を見極め良識を持って行動したいものです。

令和2年度
「大山町みんなの人権セミナー」
 延期のお知らせ

5月開始予定の「大山町みんなの人権セミナー」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開始を7月まで延期します。また、7月以降も新型コロナウイルス感染症の状況によっては、延期ないし中止になる場合があります。

◆問い合わせ先

福祉介護課 人権推進室
 ☎0859・54・2286
 FAX0859・54・2413